

中村本夜寢覚物語の素材

永井和子

- 一、中村本の冒頭と構成
- 二、仏教的なことば
- 三、その他の素材
- 四、中村本の成立と作者

中村本夜寢覚物語は平安時代に成立した「ねぎめ」の改作本である。従ってその内容の大部分を「ねぎめ」に負っていることは勿論であるが、仔細によみくらべてみると、そこには原本にない新しい素材も幾分とり入れられていることに気がつく。原本の改変であるというよりむしろ積極的な挿入に近いこれらの点を指摘し、中村本の成立をもあわせて考えてみたい。

一、中村本の冒頭と構成

中村本起筆の部分

しとうの露のそこの花のいろおとろへ、すいちくのけぶりのうちにとりのこゑもまれになりゆけば、春のなご

り、まはかぎりにやと、ながめぬ人なきゆふへ……

は、既に指摘されているように⁽¹⁾、和漢朗詠集上、春、藤の、

紫藤露底残花色、翠竹烟中暮鳥声（四月有餘春詩、源相規）

をふまえている。物語類を探ると、「とりかへばや物語」にも女右大将の描写として

縁のつまにしばし立ちとまりてうち見廻らして「翠竹のほとりの夕の鳥の声」とゆるゝかにうち誦じ給ふ声、

あないといみじとのみぞ聞ゆる。

とひかれているから、親しまれた詩句だったのであろう。中世になると謡曲「藤」に「しとうの露のもとに残る花

の色はげに面白や、水の面に月のかすめる春もはや」とみえている。この書き出しは一見「狭衣物語」の

少年の春は惜しめども留まらぬものなりければ、弥生の二十日餘にもなりぬ。

の影響を受けたかに見えるのだが、実は物語そのものの冒頭ではなくて、そのように鳥の声もまれになった晩春の夕、風流な人々が東山に集って物語について話をはじめ、そのうち話題が夢の叶うことに及ぶや、年かさの一人がその例として次のような「物語」をした、というのであり、「物語」の最後は「かやうに夢はむなしからぬ事と、ありがたく侍しとぞ」と結ばれている。原本「ねざめ」の

人の世のさまざまなるをみきぎつものに、なほ、ねざめの御なからひばかり、あさからぬ契ながら、よに心づくしなるためしは、ありがたくもありけるかな。

は大きく変えられているのである。

この、序と攔筆部の相呼応した構成は、今までの物語には見られなかったものである。これはむしろ大鏡以下四

鏡の形式として知られており、起源は經文等の問答体構成や、旧辭の伝統、源氏物語「雨夜の品定め」等の座談の部分その他に求められている。中世に至ると、野守鏡、無名草子、和歌色葉集、宝物集、太平記中の北野通夜物語等にみられ、中世小説十番物争、窓の教もこの形をとっている。⁽²⁾ 中世にこのように一般化したことについては、当時の實際の法談、説教の場にも大きな関係があるといわれている。⁽³⁾

問答・座談という器の中に批判精神を盛り込んで最も有効に用いたのは大鏡であったが、他は殆ど形式面のみの模倣に止まってしまった。中村本にしても、単に「語りしは」：「かやうにゆめはむなしからぬとぞ」に呼応が見られるのみで、物語の内部にまで話者や他の人が介入して来ることは全くない。このように首尾のみを整えたもの、

書名	形式	成	立	作	者	場	所	登場人物(※前は直接話者)	季	節	内	容	話者の
大鏡	鏡	万寿二(三〇三)	以後	不	明	雲林院	菩提講	※大宅世継(百五十)			歴	史	アリ
今鏡	鏡	嘉応二(二七〇)	カ	為	経	初瀬寺	帰途	夏山繁樹(百四十) 生侍	三月十余日	のころ	歴	史	ナシ
水鏡	鏡	建久六(二二五)	以前	中	山忠親	初瀬寺		※老尼(百五十余)	二月初午		歴	史	ナシ
増鏡	鏡	永和二(二七〇)	以前	不	明	嵯峨	清凉寺	※老尼(百余)	二月中五日		歴	史	ナシ
無名草子				俊	成女	東山	最勝光院近	筆者	五月十日よ		物	論	アリ
和歌色葉集		建久五(二二五)		上	覚	雲林院	菩提講	※老尼(八十)	五月朔朝		歌	論	ナシ
野守鏡		永仁三(三二五)		有	房	播磨書写	山性空	※入道(六十余)	僧(五十余)		歌	論	ナシ
中村本ねざめ				不	明	東山	のほとりを	※入道(六十余)	春の終		物	語	ナシ
						かしきすまひ		※ふるるき人					

又座談問答形式で物語を進めるもの等のちがいはあるが、ともかく「老人の経験した事実を伝承するといった作品の規定を施している」ものを一応表示してみよう。⁽⁴⁾

このうち無名草子は、話のすすめ方として月・文・夢・涙・仏・物語を持ちきたっているが、⁽⁵⁾中村本も座談の内容が月や夢のことから物語に移行すること、舞台が東山のあたりの邸であること等似ており、或は何らかの影響があるかとも考えられる。

これらの背景は「寺」や「仏教」であるのに、中村本では「すきく／＼しき人々、ひんがし山のほとりにおかしきすまひあるにあつまりて、れんが・わかのかわいななどは中々なりとして、ふるき物がたりやさうしのなかにおぼつかなき事どもをいひあはせつつ」と、専ら風流事を中心としていることに注意される。そして他の何れもが、不自然な高齢者を不自然な作為をもって登場させているのに比べると、中村本はあくまで自然である。この形は文献の上での結構を受けついでと同時に、当時の実際の場をも背景としていたのであろう。

中村本の形式の意味を考えてみよう。四鏡以下の各書は歴史であり、無名草子は物語評論であり、野守の鏡は歌論であるが、共に既定の現実を一旦はなれ、第三者の立場から眺めての評論である点、共通なものをもっている。今鏡以下がその形式面のみ伝統的にうけついで来たのは、一つには、それが客観的に厳正な事実の羅列ではなくて、ある仮託された人物の主観的な解釈もゆるされるのだ、という書きやすさがあったことも理由のひとつではないかと考えるのである。それを非現実的な「ものがたり」という形で記さねばならなかったところは、歴史に現実の個人の立場で統一を与え責任をもって形成した愚管抄・神皇正統記などとは根本的に異っている。ある現実の時と場所を規定した話者を登場させれば、逆に現実時間は時間と空間の束縛から離脱するのである。時間的ひろがりを持った

長い歴史を一個人に仮託するには不自然な高齡を話者に与えねばならず、果ては水鏡のような仙人まで登場してしまふのである。

一体、宇津保、源氏等をはじめとして、物語はもともと昔語り、聞き書き、の伝統を暗黙のうちにふまえているもののはずである。その自明なことが忘れられて、更に改めて「ふるき人のかたり侍しは」とわざわざ記さねばならなかつたところに、中村本の時代的な新しきがあるといえよう。更にそれが作者の創作ではなくて、中古の「ねざめ」の改作本であることと緊密に結びついているのではなからうか。即ち先の四鏡などを形づくっていたのと同じく、過去の事実を一步はなれたところから述べようとする姿勢から、間接的な受動的な形をわざわざとつたのではないかと考えられる。「とりかへばや」「あまのかるも」等の改作本にはこのような形はみえない。中古末から中世にかけて原作ねざめはかなり人氣のあつたものであることが無名草子その他から知られる。或は、他の物語に比してこのねざめは量的にも質的にもある人々の間で重きをなしていたというような事情があつたために、改作本を作る際に筋書きを主とした作り直し本であることの弁護としてこうした技巧を用いたのではないかと考えられるのである。それではこの改作本の作者は誰であらうか。現在それを確かめるべき資料は何も残されていないが、もう一步退いて、この物語の話者はだれか、一体男性なのか、女性なのか、と問うとき、それはおそらく男性であらうと考えることができる。物語の内部からもそれはうかがえるのであるが、この序の部分の「れんがわかのかくわい」もそのひとつである。

ここにいう「れんが」「のかくわい」とは単なる短連歌の応答ではなく、定つた長さをまく長連歌の会をさしていると思われる。これが民間にひろまって来たのはほぼ鎌倉中期のころといわれている。⁽⁶⁾このころ女性は連歌の会に参

与したであろうか。良基の筑波問答には

弁内侍少将内侍などいふ女房連歌師はみすのうちより紅のはかま衣の妻口をし出してかほりみちて心もをよばぬ句ども申出され侍しかば人く感にたへず。高声に吟詠せられき。又御腹取の尼とて七八十になる連歌しも侍りき。それは京極中納言入道などおなじ時の人にて侍しやらん。此比は女の連歌しなど侍らぬ無念の事也。

（群書類従本）

とあって女性が携わるのは珍しいこととしている。同じく良基の菟玖波集をみると幾つかの女性の作があるが、その中で長連歌に参加したとおぼしいのは弁内侍(12首)・少将内侍(13首)のみであとは短連歌の応酬にすぎない。弁内侍日記には連歌の記事が四度ほどみえ、今鏡「花の主」にも越後乳母・小大進等が鎖連歌などをしたとある。しかしこれも宮中を中心とした女房社会のことであって「東山あたり」などに気楽につどったわけではない。竹林抄・紫野千句の時代にも勿論女性の名はない。記録にないからといって、無かったと言い切ることはできないが、当時一般の大勢としては連歌は男性のものであったといえよう。

してみるとここに「れんが・わかのかくわいなどは中々なり」と無造作にいつているのは、これが既に一般的な楽しみの常識的なものになった時代、即ち鎌倉中期以後、室町に近いころを示し、かつここに集うたのはおそらく男性であった、従って物語をした「ふるき人」も男性であったであろう、ということになる。更にいえば、話者のみならず、その序を書いた作者も、男性であった可能性が大きいと思う。この点については又後にふれたい。

無名草子によると、「このころ出できたるもの」の作者として男性である隆信や定家の名前がみえる。しかし無名草子は老尼をめぐる若い女性達の座談であることが示すように、この時代にはまだ物語は作者も読者も女性が中

心であつたであろう。これが室町時代に至ると中世小説者としての男性の名がかなり記録されてくる。してみるとこの中村本はその中間の時代、即ち男性によつてかたられる（或いは作られる）物語が、さほど不自然ではなくなつたころを示すのかもしれない。

二、仏教的なことば

a 「とにかくに心はだい一のあた」とほとけのたまひをきけん事をぼししられ給ふ。（上239頁、以下引用は古典文庫本による）

この部分は原本中間欠巻部分である。主人公が女主人公を恋い、やすまる時とてないわが心を嘆いている感慨のこぼである。往生要集・地獄に「心は是れ第一の怨なり。此の怨最も悪と為す」とある。

b いける物をはりなきならず。めうかくくはまんの月もあかつきの雲にかくれ、しんによじつさうの水もゆふべのなみ（お脱カ）をこす。うみむじやうのならひ、かひなき事なれば、よはのけふりとなしたてまつりぬ。（下62頁）

大君の死に際しての描写であり、原本は同じく中間欠巻部に属する。漢字に置きかえれば

明覚果満の月は暁の雲に隠れ、真如実相の水も夕の波を起す。有為無常の習……

であろう。平安期の物語、中世の軍記物類には、似た詞が多い。たとえば栄華物語には「善円浄満月」「妙覚之理」「真如実相」などの語があらわれているが、この中村本と全く同じ句は今のところ見出してはいない。

c 御いのりはしるしありとも見え侍らぬに、いし山にこめまいらせてこゝろみ侍らばや。このてらはかつしろ

しめしたるやうに、しやうむてんわうのとう大じの大ぶつの御れうに、こがねをいかがすべきとおぼしめしけるに、てんたい十九年の秋のころ御むさうに「あふみの国くるものとこのほり、みづうみのきしのほとりにせうちあり。くだんのところにならんをたてゝ、によありんのほうをおこなはれしに、そのとしのしはすに、しもつけのくにより、こがねいできたるよしをそうもんす。これほどかたき事だにもかなひ侍ればしばしこめたてまつりてこゝろみ給へかし。（上67―77頁）

この部分は原本に

この御心地のかくのみ侍るを、物問はせ侍れば、「石山に籠りていと善し」と（申す）。こゝら思ひ残すことなき御祈の驗有とも見え侍らざるを、さてや心み給ふべき。（卷二79―80頁。以下引用は校本夜半の寝覚による）

とあり、「いし山云々」のくだりは明かに中村本の補入である。「かつしろしめしたるやうに」とあるからにはこの話が石山寺の創起を示すものとして作者にとつては充分親しいものであったことを示すのであろう。

ところで、石山寺の起りについては、中村本の記載をまつまでもなく、諸記録にさまざまの形で残っている。これらは寺院の記録、縁起をはじめ、歴史・説話・物語などの各分野にわたるのであるが、東大寺大仏の創建と石山寺と結びついている点ではいずれも同じである。しかし細かい点をよみくらべてみるとそれらは自ずと三つに分類することができるようである。

（1）石山寺者、聖武帝創東大寺、鑄一十有六丈遮那銅像、多聚金為薄、此時本朝未_レ有黄金、帝語良弁法師曰、伝聞、和州金峯山、其地皆黄金也、師祈金剛藏王、得金資銅像薄、不亦宣乎、弁入金峯山持念、夢藏王告曰、此山黄金不_レ敢自恣也、今亦汝別方近州湖西、勢多県、有二山、如意輪觀自在靈応之地也、汝至彼持念必得黄金、

- 弁便赴_二勢多_一、時老翁坐_二、大石上_一釣魚、弁問云、汝何人、対曰我是山主比良明神也、此地觀音之靈區、言已不見、弁就_二其石_一縛廬、安_二如意輪像_一、持誦、不_レ幾、奥州始貢_二黃金_一、爾後刻_二、丈六大悲像_一、藏_二先像於中_一、亦造_二金剛藏王及執金剛神_一、安_二左右_一、其像各八尺、当_二夷_一、其趾、地中得_二五尺宝鉢_一、益為_二靈地_一。〔元亨釈書〕国史大系所収圖書寮本による。
- (2) 石山寺、聖武、御願、朗弁開山、大仏建立之時、依_二無_一沙金、昼夜大息間、夢中有_二人奏云_一、水辺建_二立伽藍_一、祈請、求_二勝地_一、建_二立觀音像_一、下野国初貢_二沙金_一、今石山寺是也。〔謡鈔、田村〕小山弘志先生御藏本〔寛永頃の版本〕による。
- (3) 伊勢大神宮禰宜延平日記云、天平十九年丁亥九月廿九日、始而東大寺大仏廬舎那仏被_レ奉_二鑄鎔_一、未_レ成羣給、而依_二無_一可塗_二件大仏_一之金、天皇御心不_レ靜、歎念御之間、蒙_二示現_一、御須告_二云_一、近江国栗太郡、水海岸頭山脚、有_二勝地_一、件地建_二立伽藍_一、而修_二如意輪法_一者、必金宝者可_二出来_一也者、即御夢覺之後、件栗太郡勢多村下一勝地、急建_二立伽藍_一、安置_二如意輪觀世音_一并執金剛神像各一鉢石山寺、是也、修_二行件如意輪法_一、給_二之程_一、以_二同年十二月_一、從_二下野国_一、奏_二聞金出来之由_一也云々〔筒井英俊氏「東大寺要録」本願章第一による〕

右の引用によつても明かなように、石山寺創建の記録はいずれも傳説的な色あいを帯びている。

(1) は本朝神社考、和漢三才図会にほとんど同じ形でひかれ、又仮名交り文ではあるが謡鈔の源氏公養、鸚鵡小町は全く同じ伝をしている。石山寺縁起もほぼ同じ内容が仮名文で書かれているが、この縁起は良弁僧正を中心とした、説話的要素の濃いものであつて、絵に重点が置かれ説明の方はかなり簡略になっている。今昔物語巻十一、第十三「聖武天皇はじめて東大寺を造る物語」は題の如く東大寺創起中心のもので、筋は同じであるが石山寺の名は末尾に「かの椿崎の如意輪觀音は今の石山なりとなむ、語り伝へたるとや」〔朝日古典全書本、巻一〕とみえるのみである。三宝絵詞下六月二十二、東大寺千花会の記載も量は少ないが今昔物語と同じ内容をつたえる。扶桑略

時については、天平十九年というはつきりした年月は(1)(2)にはみられない。天平十九年は現実の記録としても正確であるといつてよい。

場所は、(1)の伝では志賀郡、であり、これは現在の石山寺の所在地であつて、和名抄にもみえ、問題はない。そうすると東大寺要録の「粟太郡」、中村本の「くるもとのこほり」は、どこであろうか。これも近江国の一郡で既に和名抄にみえ、ちようと志賀郡とは瀬田川をへだてた対岸に位する。和名抄に「粟本訓久留毛止」とあるが、雄略記、延喜式などには「粟太クリモト」とあり、「クルモト」「クリモト」両訓があつたようである。この郡は現在でも志賀県栗本郡として存在し、「クリモト」とよんでいるものと思われる。この志賀・栗太両郡は和名抄のころから広さ、境界など変更はない。従つて中村本の「くるもと」は「り」と「る」との転写の誤まりではなく、現実の称呼であつたと考えてよからう。しかし、近いというだけで粟太を誤つたとするのはやや不安である。幸にして粟太郡には大部五巻の「近江粟太郡志」(大正十五年刊、郡役所編)がのこされている。同書所収の正倉院文書などの資料によると、石山寺創建のために、同郡田上山・大石山等より多量の建築資材を運搬し、且つ食料供給や使役人夫・楡皮工・画工の働きもあつた、という事実が存在する(同書第一卷、三十三章「石山寺の創立と田上山、大石山」)。即ち当時志賀郡瀬田のあたりは文字通り石の山であり、資源人材も乏しかつたため、対岸の粟太からその大半を得ていたのである。そうしてみるとその当時において粟太と瀬田を混同し、ともに石山寺の創建の地とする伝が生じたことも、さほど不自然ではないように考えられる。正史ではなく伝説的な記載に頼らねばならないのであるからこの種の異伝はむしろ当然かもしれない。

仏像は、元亨釈書などには、丈六の大仏の左右に如意輪観音・執金剛神二像を安んじたとあり、その地は奈良で

あるが、要録、中村本は石山寺に据えて祈禱したとある点一致している。（東大寺大仏の歴史については「東大寺の歴史」〔東大寺と国分寺〕へ至文堂歴史新書〕にくわしい。

金の出たところは下野・奥州両伝あるが、現実には陸奥が正しく、要録・中村本いずれもあやまっている。以上のように、中村本は細かい字句に至るまで要録に近い記載をもっているのである。ことにやや混乱や誤りのある点もそのままうけついできている。東大寺要録は、東大寺に関する古記録を編した東大寺の歴史ともいべきもので、作（編）者は不詳であるが、その成立は嘉承元年（一一〇六）から長承三年（一一三四）頃かといわれている。

一方これは諸記録を編纂したものであるから当然漸次増補されていることが予想され、事実その年代は元応年間（一二一九—一二三二）まで下り得るといふ。要録と中村本との間に中間資料があったことも充分考えられるし、又原資料が要録本願章と中村本とにそれぞれ入った、とみることも可能である。⁽⁸⁾

（一）の伝が当時一般的であったことを考えると、（三）の伝をとり乍ら「かつしろしめしたるやうに」といつているのは、これを書いた人にとっては（三）の方が（あるいは（3）だけが）したしかつた、ということの意味しているのではなからうか。ここで中村本の作者の問題にたちかえてみると、どうもそれは男性であったらしいと先に述べたことが、ここでもいえるように思われる。ここで石山寺云々の補入があることは宗教的傾向の例であると金子氏は述べられたが、女性作者であったら、もっと耳なれた、今昔や石山寺縁起にとられていた伝説を述べてもよさそうに思われる。要録を直接ひいたと断定できれば、それを耳からきいているのではなく、要録を手に入れ自身の眼で見てかな文に写しかえることのできた人間、そしてその記事が自他ともに石山の伝であると思っていた、特殊な世界の人、即ち仏教に關係のある男性が作者である、と考えてよからう。又、かりに中間資料の存在を認めると

しても、(3)の伝をよく知っていた、限られた世界の男性、とだけはいえるように思われる。

三 その他の素材

a 「いかにみだるがはしくあやしき物におぼすらん。ひかるげんじはふちなみにしづみさ衣の大将はみちしばの露にしほれ、五郎中将はすみかをさだめずくにありき給けり。これみなつたなき心にあらず……」(上209頁)

原本欠巻部分である。「ひかるげんじ」云々は、かつて鈴木一雄氏も述べられたように、原本にあったとは考えられない。「ひかるげんじ」「さ衣の大将」は問題ないが、「五郎中将」なる呼称は在原業平をさすものとして耳馴れぬ表現である。これは十訓抄第八可_レ堪_ニ忍_ニ干_ニ諸_ニ事_一の小序に

五郎中将の「後もたのまん」とよめる、歌の詞もをかしく、周防内侍が「我さへのきの」とかつける云々とある五郎中将は「後もたのまん」が伊勢物語の

忘れ草おふる野辺とは見るらめどこはしのぶなり後もたのまん

をさしていることから、業平に対する呼称であると認めることができる。従って中村本作者が、この呼称を用いてもさほど不自然ではないということになろう。なお十訓抄の成立は建長四年(一二五二)である。

b 中なごんはしらざりし程はとらふすのべ・よもぎがしま・ちいらのそごなりとも、あり所きかばときをたがへずたづねおはしぬべくおほえ給ひしをこそなぐさめにおもひ給しに(上50頁)

原本に

誰と知らざりつる程は、蓬萊（三行）の山といふとも「そこにその人は」と聞きつき（ナセサ）けなば、必ず尋ねのほり行（三行）あひなん。（卷一43頁）

とある部分でこの「蓬萊の山」が敷衍されている。

「とらふすのべ」は拾遺集、雑恋に

男もちたる女をせちにけさうし侍りてある男の遣はしける

ありとても幾世かはふる唐国の虎ふすのべに身をも投てむ

とあるのをはじめ、新千載集、正徹物語、謡曲野守などにみえる。

「よもぎがしま」は堀川百首にすでにみえ、夫木集、新千載集、謡曲くさなぎ、揚貴妃、養老などにみえる。

「ちいろのそこ」は本文「い」の傍に（ひカ）の註があり、「千尋の底」をさしているとみてよいであろう。

このようにひとつひとつのことばはさほど新しいものではないが、三つまでわざわざ重ねているところは興味深いものがある。これに似た表現として、中世小説である梵天国に、

虎臥す野辺、火の中、水の底までも後れ奉るまじきなり。

という姫君のことばがあらわれる。これをもってみれば、こうした強調の表現は類型的なものであって、当時の人にわかりやすく改変するとすれば「とらふすのべ・よもぎがしま・ちひろのそかなりとも」といった耳なれたことばをもってこざるを得なかったことを示すのであろう。

c 「こをおもふみちには身をもすつる物とこそ聞け。このうちつる・やけのきぎすだにおもひわくなるに、

まして人としてかほどおぼしはなれたる御心のほど、あやしくめづらかなにも侍るかな。……」（下181頁）

「このうちのつる」はよくわからないが、白楽天の「夜鶴憶_レ子籠中鳴」（和漢朗詠集管絃）の詞句をとって「夜の鶴」と同じ意味に用いているのではないかと思われる。女主人公があまりにかたくななので、主人公がそのうらみを女主人公の兄に伝えている部分である。「夜の鶴」はすでに詞花集に高内侍のうたとして「夜の鶴都のうちにこめられて子を恋ひつつも鳴き明かすかな」などとみえているが、「焼野のきぎす」はそれほど古いものには見られず、発心集、太平記、中世小説である魚鳥平家、などの時代になるようである。そしてこれが「焼野のきぎす・夜の鶴」となると、子を思う情のたとえとして常套的に用いられるようになる。即ち謡曲・唐船に

たづきも知らず泣きぬたり、身もがな二つ箱崎の、うらめしの心づくしや、例へば親の子を思ふ事、人倫に限らず焼野のきぎす夜のつるうつばりのつばめも皆子ゆゑこそ物思へ

とみられるのがこれである。従って中村本の表現も「とらふすのべ云々」と同じく耳なれた類型的なことを持つてきたと見てよいであろう。ただ、先にのべたように「このうちのつる」が「籠の中の鶴」であるとしたら、まだ成句というほどには固定していないかたちを示しているのであろう。

d 女主人公懐妊のため、主人公と相具して石山に詣でた帰りの描写に次の部分がある。

七日すぎぬればいでさせ給ふに、うちいではまといふ所にて、くにのつかさ御まうけしてかり屋などまうけたるに昔ていしのみんのいし山より御げかうの時、くろぬしが「なぎさきよくは」といひけん心地して、御車とどめてながめ給ふ。くにのかみゆへくしきものにて、いみじくとくのへたれば、之見すぐし給はでわか

き人々うつろひたるきくをかざして、しろきすなごになみのよせくるいそのほとり、しぐれをもちとはずまひそはれたる、いとおかし。うたどもあまたありけれどそのおりのみだりがはしきに、はか／＼しからんや。

（下224～225頁）

直接には傍点の部分が「昔……けんこちして」の内容であるが、実際には右に引用した部分全体が次の大和物語百七十二段をもとにして記されている。

亭子のみかどいしやまにつねにまうで給ひけり。くにのつかさ民つかれくにほろびぬべしとなむわぶるときこしめしてことくに／＼のみさうなどにおほせてとのたまへりければもてはこびて御まうけをつかうまつりてまうでたまひけり。あふみのかみいかにきこしめしたるにかあらむとなげきおそれて又むげにさてすぐしたてまつりてむやとてかへらせ給うちいではまに世の常ならずめでたきかりやどもをつくりてきくのはなのおもしろきをうへて御まうけつかうまつれりけり。くにかみもをちおそれてほかにかくれをりてただくろぬしをなむすへをきたりける。おはしましすぐるほどに殿上人くろぬしはなどでさぶらふぞととひけり。院も御くるまをさへさせ給てなにしにここにはあるぞとはせたまひければ人々とひけるに申しける

さゝら波まもなくきをあらふめりなきさきよくは君とまれとか

とよめりければこれにめでたまうてなむとまりて人々に物給てかへらせ給ひける。⁽¹⁰⁾

この話は石山寺縁起にほとんどこのままの形でみえ、又黒主の歌は新千載集卷十六雑上に「亭子院石山にまうでさせ給へりける日近江国の司打出浜に御まうけ仕りたりけるをただに過ぎなむとせさせ給うければよめる」の詞書をもって「ささら浪間もなく岸を洗ふなり渚清くは来てもみよとか」の形でとられている。百練抄にも亭子院が石山

に行幸になった記事がみえる。中村本では亭子院を主人公に変えて仕立てたのであるが、殆んど大和物語そのままを持ってきているのはかなり大胆な手法である。

この記事は原本にあったものであろうか。この部分に対応する原本巻三～五の現存部には確かにない。しかし中村本の巻五後部には、原本巻五以後の散逸部分が時として織り込んであるので、簡単には断定できないのである。

原本の筋の上からみると、たとえ主人公・女主人公の結婚が父入道により認められたものであったとしても、大皇宮・女一宮が存在する以上、このような二人だけの石山行きは考えにくいのである。そもそも石山は原本のねざめに於いては(1)但馬守三女と宮中将のゆきあい、(2)女主人公の、参籠の為と称して秘かに女兒を出産した場所として登場するのであるが、中村本ではこのほか下(五)221頁以下に、

かくてとのうへ、又ただならぬ御けしきになやみ給を……御いのりのためにいし山にぐしたてまつりてこもり給べきよしおほす。

と、(2)に呼応するものとして扱われている。ここには主人公・左衛門督(さきの宰相中将)・ゆきより・ための君・法性寺僧都・女主人公などの(2)に対する回想のことがあり、(2)の苦しかった折にひきかえての現在の幸の極みが強調されている。そしてこの石山行となるのである。従ってこれは中村本の補入と考えた方が妥当であろう。

e 原本の中間欠巻部分であるが、左大将の許に嫁がんとする女主人公をうらんで主人公は広沢にひそかにしのび入った。一夜の主人公のゆめとして次の記事がある。

あかつきがたにちとまどろみ給ふ御夢に、いとうるはしくびんづらゆひたるわらはの、こがねのしきしにつら(つか)

める物をとりいだして「これは御もとなるたまのたくひなり」とてたてまつりたるを、ひきあけて見給へば、しきの一のまきの、たまのちくしたるなりけり。めでたきふみのさまかなと見給ふに、このをんな君、「これこそほうらいの山のたまのえだよ。一えだは御もとにあり。これはまろがにせん」とてとり給ふを、わがもとなるにらべてこそためと思て、とらんとすれば「しばしなをこれは、をきてみん。つめにはたてまつらん」とて、ふところひいきいれ給ふ、と見給ふ程に……。〔上181〜182頁〕

夢ときはこれを

あめのしたならびなく（かか）こくすぐれ給へるおのこどぞ、いできおはしません。ただし、それをよそにやきゝ給はんずらん。さりともしつめには御てにえたてまつらせ給てん。〔同185頁〕

と解いた。これも原本にあったかどうか考えてみよう。まず、主人公が広沢の女主人公の許に忍び入った事件であるが、これは拾遺百番歌合十番右に

年久しく絶えて後、めぐりあひたまへる秋、月のひかり虫のこゑも、ただ昔ながらの心地して、石山にて
住みはつまじき契りなりけむと聞えし程、わかれ給ひしよの心ちおぼし出でられて、なか／＼心づくしも
ややたちまさりて、人やりならず、涙にくれて 関白

かざりとて命をすてし山ざとの夜はのわかれに似たる空かな

とある秋のことが中村本のこの部分に相当しよう。従って「忍び入った」ことは原本にあったことである。

これは竹取物語の、かぐやひめから「ほうらいの玉の枝」を持参すべく言い渡された車持皇子が、作りものの枝をかぐやひめに捧げの口上に影響されていよう。

……天人のよそひしたる女山の中より出でて、銀のかなまりをもて水を汲みありく。これを見て船よりおりて「この山の名を何とか申す」と問ふに女答へて曰く「これは蓬萊の山なり」と答ふ。これを聞くに嬉しき事限なし。この女に「かく宣ふは誰ぞ」と問ふ。「我が名はほうかむるり」といひてふと山の中にいりぬ。

次にこの夢そのものはどうか。無名草子等で、中君の夢にびわを教えた天女について言及してはいながら、この第二の夢については全く触れられていないので、中村本の創作とも考えられる。しかし一方では、たとえこのままの形ではないにせよ、何らかの形で原本に記されていたものとみることもできそうである。

「御もとなる玉」はすでに主人公のもとにある石山で生れた姫君であり、「ほうらいの玉の枝」は今度生れんとする若君（左大将に嫁してから女主人公が生むのであるが、実は主人公の長男である）を暗示していることは明かである。そうするとこの第二子も石山で生れた第一子と同じく中村本ではかなり重要な意味をもっているかにみえる。原作ではこの第二子は「まさこ」と呼ばれ、この「まさこ」が原作第二部（巻五以降）の主人公ともなつて大きな役割をもっている。しかし中村本では「まさこ」という称呼を与えられることもなく、単に左大将の長男（実は主人公第二子）という設定を荷うだけに改変されている。従つて中村本はこの原作の部分を不用意にそのまま持つて来てしまつたのではないか、という仮定もなり立つのである。それでなくては、わざわざ夢を補入すべき理由がない。しかし先に述べたように原作全くそのままというわけではなかつたであらう。

夢に天人が下つて玉を授けるとみて児や女性を得るといふ話は他にもみられ、「あさぢがつゆ」（風葉集以前成立）に美しい姫君を見出すはこびとして「見やればのゝ中にてん人のやうなる女房玉をてにもちて侍りとみてさめぬ。

……」（古典文庫本12頁）とあるし、今昔物語・因縁集には、源信の母が高尾寺に祈り、玉を得たと夢みて一子源信

（恵心）をやどした、という様に、高僧聖者の出生にからんだ説話が記されている。

f あらぬよにむまれてさらに見る心ちし給て「あめわかみこなりともこれほどはありなんや」とおぼすに、かくしづみ給たる事のいかがみなしきこえんこといみせられ給ふ御心のそこにもおぼしなげく。（上・218）

219 頁）

原本では中間欠巻部に属する。心ならずも年たけた左大将に嫁す日の女主人公は、広沢から左大将邸への道中にさえ疲れはてて正気を失った。翌朝ほとんどまだ正気にかえていない女主人公を、はじめて眼近にみての、夫、左大将の述懐である。ここにあらわれた「あめわかみこ」について考えてみたい。「あめわかみこ」にはいろいろな問題があるが、ここでは文学の面にあらわれたものに限定してまず用例をあげてみる。

（1）阿修羅木をとりいで、割り木造る響きに天稚御子くだりましまして、琴三十造りてのぼり給ひぬ。かくてすなはち音声樂して天女くだりまして漆塗り、棚機に緒よりすげさせてのぼりぬ。（朝日古典全書本・宇津保物語・俊蔭）

（2）大殿などは、あまりゆゝしく、天稚御子の天降り給へるにや、今日や天の羽衣むかへ聞え給はむと、怪しう静心なき御心のうちどもなり。（校註日本文学大系本・狭衣物語一之上）

（3）びんづらゆひていひしらすをかしげなる童の、装束うるはしくしたる薫しきもの、ふと降り来るまゝに、……（狭衣の大将が）めでたき御声して誦じ給へるに、天稚御子涙を流し給ひて……（同）

（4）更行ままに、すみまさりておもしろきに、あめわかイネアリみこのめでたまひけん琴のねも、限あればこれにはまさらじと、あまの羽衣今やおぼしやらるるに、（古典文庫本・校本小夜衣）

(5) 夢のやうによなくみなれける人に、今はかやうにもえあるまじきよし申て

夢ゆゑ物思ふのあめわかみこ

あはれとも思ひ出しや人しれぬ夢のかよひちあとたへぬとも

御かへし

中宮

これやさはかぎりなるらんうば玉のよなくみえし夢の通路（校本風葉和歌集ゆめゆゑ物思ふ）

(1) (2) (3) (4) の用例からみると、「あめわかみこ」は音楽と密接な関係をもっているものであることがわかる。(5)は散文物語であつてはつきりしないが、中世小説の「天稚御子物語」と似たものであらうとされているところからさかのぼつて考えると或は別系統の物語で音楽とは無関係であるかもしれない。この音楽に関係ある「あめわかみこ」は当時の人にとって男性であつたらうか、女性であつたらうか。勿論こうした神秘的な抽象化した存在であるから、どちらとはつきり決めるべきものでないかもしれないが、一体男性か女性か、そのどちらでもよかつたかを一応たしかめてみたい。

(1)では別に何ともいっていないが、天女と区別しているところからみると、男性かとも考えられる。(2)は狭衣の大將の形容であり、(3)も「びんづらゆひて云々」とあることから、男の童をさすものとみられる。(4)の「あめわかみこのめでたまひけん琴」とある過去のことは何を指しているのかよくわからないが、「こと」と「笛」のちがいで、さごろもを指しているとも考えられる。(5)は中宮と契を交すのであるから明かに男性である。以上ここにあげた限りでは男性もしくは性をこえた存在として考えられていたようである。

「天稚御子の物語と七夕物語」において三谷栄一氏は中世小説である「天稚御子物語」と「七夕」の説話がい

に混乱してきたかを説かれた⁽¹¹⁾。その中であめわかみに関して狭衣にでてくるあめわかみを無名草子で「狭衣のあまの乙女」といつていることについて「絵巻などに見る狭衣の場面の美しい御子の描写の印象から誤解したのかも知れないし、竹取物語の聯想も関係はあらう。」と述べて居られる。即ち、本来は男性であるが、たまたま女性とまちがえられることもあったとされているのである。

中村本のあめわかみはどうであろうか。これは原本にあったかどうか確かめるすべもないが、ここに見える限りの内容では音楽について何もふれていないから音楽との関係であめわかみがひかれているとは考えられない。ただ、女主人公に対しての比喻に、神秘的な美しさを持った人間として「あめわかみ」がひかれているのである。従つて、中村本のあめわかみは男性と考へない方が自然であろう。とすれば、狭衣のあめわかみを「天つ乙女」と考へている無名草子と似た形のようにでもある。(勿論、中村本のあめわかみが性をこえた存在としてひかれているならば問題にはならない。)これを、中村本の作者があめわかみを女性と思ひちがえていたためとみることもできよう。しかし無名草子の例を思うとき、むしろこうしたあめわかみこ観は当時の一般の人々の間に生じていた混乱を反映したものではないかと想像される。

一方「あめわかみこ」ではなくて「天女」が音楽を賞でて天下つたとする話も多いのである。先にあげた宇津保もそうであったし、原本ねざめで女人公中君の夢に下つたのは「天つ乙女」であると巻四に明記してある。「とりかへばや」にも「何某の大將の笛にめでておりくだりけむ天つ少女」とあるし、最近発見された「有明の別」にも「あまをとめ」とみえる。江談抄などは天武帝吉野行幸の折、琴に賞で天降つた「天女」が五節の舞姫のはじめであると伝えている。

「あめわかみこ」が女性と考えられたのは、右のような音楽と結びついた「天女」の話から来た混乱であろうと思われる。即ち、音楽をめぐる天女の話と、同じく音楽をめぐる「あめわかみこ」(男性)の話が結びついて、今度は逆に「あめわかみこ」まで女性と考えられるに至ったのではあるまいか。そしてその混乱のもとには、「あめわかみこ」が非常に美しい人であるという点であった。そしてその点が強調されると、中村本のごとく、音楽とは全く結びつかず、単に美しい女人の形容として用いられるに至ったのであろう。

そして、中国の説話などから抽象的存在である「霊」が天下った話も多く伝わっていて、むしろこの方が話としては古い。即ち男性女性どちらでもよい、もしくはどちらでもない存在が、物語にとり入れられると或は「天女」に、或は「あめわかみこ」に、具体的に記述されたのであろう。それゆえ、先の「夢ゆゑ物思ふ」「天稚御子物語」が、男性である「あめわかみこ」の話として発展していても、何ら不思議はないはずである。

従って「あめわかみこ」の使い方からみても、中村本は独自のものをもっているということができるかもしれない。

四 中村本の成立と作者

中村本の成立の問題については、鈴木一雄氏が神宮文庫本(中村本巻二に当る零本)の内容の

- (一) 無名草子にみえない。
- (二) 風葉集にみえない。
- (三) 狭衣の影響がある。
- (四) 文章・用語なども鎌倉時代の物語として通じると考えられる。

ということから、「風葉集以後鎌倉末期」であろうという結論を出された。⁽⁹⁾年数でいえば大体一二七〇年から一三三〇年までの六〇年ほどのことになる。(一)(二)の点は「とりかへばや」「今とりかへばや」「今かくれみの」が無名草子や風葉集にとられているにもかかわらず中村本ねざめが見えないことによるのであるから、成立の上限を決める上で、かなり確実な論拠となり得るであろう。(三)(四)は、神宮文庫本の範囲内での推定であるが、これは中村本全体についても言えることである。鈴木弘道氏も大体の成立を「鎌倉時代中期を遡るとは考えられない」としておられる。⁽¹⁰⁾本稿では限られた資料よっての推論をのべてきたが、素材の面から考えてもこの成立年代は大体妥当であると思われる。

まず冒頭の形式は、この時代の歌論書・連歌書に多く見えるものであるし、「連歌の会」もそれを裏づける。鎌倉中期まではまだ一般にさほど広まっていなかったようであるから、記録にも残らないような地下一般の連歌が盛んになったのは、正和(一二三二)ごろの、むしろ末期に近いころのことかと思われる。

中世作品の著しい特徴のひとつに宗教的であることがあげられるが、中村本に見るかぎり、特に仏教的な面が強いとも思われない。しかし断片的には経文などを引いたと思われる語句も散見するし、特に石山寺の由来を語る部分では、当時いかに石山寺が信奉されていたか、かつ作者もその知識を示そうとしたかが知られて興味深い。

その他の面については、十訓抄に同じような表現があり、又中世小説の梵天国、謡曲の唐船以前であろうと思われる表現がある。天人が玉を授けて子をなすという話は今昔物語や因縁集に類型がある。「あめのわかみこ」の用い方から見ても、無名草子以後、中世小説以前という線は変らない。以上のように、素材面からの考察は、成立の年代を決定するにはまだほど遠いのであるが、従来の鎌倉中―末期説をうらづける一つの傍証とはなるであろう。

ただ、中期というよりいくらか末期に近いのではないかと思つてゐる。

次に作者について考えれば「れんが」のこと、石山寺の由来のことからして、おそらく男性であろうことはすでに述べた。そしてこの作者はかなり文学的な教養のある人であつたことが、本稿に取上げた部分からもうかがわれる。原本ねざめをよみちがえたところに中村本が成立しえたともいえるのであるが、逆(13)にみれば、当時の人の好尚、時代の要求するところを敏感に感知し得た人⁽¹⁴⁾だつたわけである。そして作者が男性であつたとすれば、中古——中世といった時代の移りのみでなく、女性の作品であつた原本ねざめが男性の手にわたつてこのような内容をとげた面も考えねばならないであろう。男性が物語に手を出すのは鎌倉末期においても余技の域を出なかつたであろうから、中村本の改作もさほど真面目にとりくんたものではなく、むしろ読者に対する意識的なサービスの意味が強いかもしれない。このような人が作者であるとすれば、なおその改作の実態について深く考えてみる必要がありそうに思う。それは即ち鎌倉期の一般知識人たちの原本「ねざめ」に対するよみとり方の一つを示すものであるからである。

註

- (1) 金子武雄氏、古典文庫本夜寝覚物語解説。
- (2) 市古貞次先生「中世小説の研究」86頁以下参照。
- (3) 鈴木一雄氏「大鏡と後代文学」国文学二ノ十二など。
- (4) 塚原鉄雄氏、「物語冒頭の史的展開」人文研究九ノ二。
- (5) 宝物集の手法に近いといわれている。富倉徳次郎氏「無名草子評解」解題など。
- (6) 福井久藏氏「連歌の史的的研究」木藤才藏氏「連歌」日本文学史・中世

- (7) 註(2)、「中世小説の作者」の項参照。
- (8) 三谷栄一氏「物語の行方」(国語と国文学昭和34・4)に中村本における石山寺についての御論考があるが論述のちがいなどあるので旧稿のまま掲げる。
- (9) 神宮文庫本「よはのねざめ」について。国語三ノ一
- (10) 阿部俊子先生「校本大和物語とその研究」による。
- (11) 物語文学史論所収。
- (12) 「中村本夜寝覚物語の成立に関する試論」国語と国文学、昭31・12
- (13) 永井和子「ねざめの構造」平安文学研究第二十五輯 昭35・11 同「ねざめの改作態度について」学習院大学国語国文学会誌第六号 昭37・6
- (14) 松尾聰先生「菅原孝標女——その作品『夜半の寝覚』の形態について——」昭7・7 のち「よはのねざめの物語、同補正」として「平安時代物語の研究」所収。東宝書房 昭30・6